

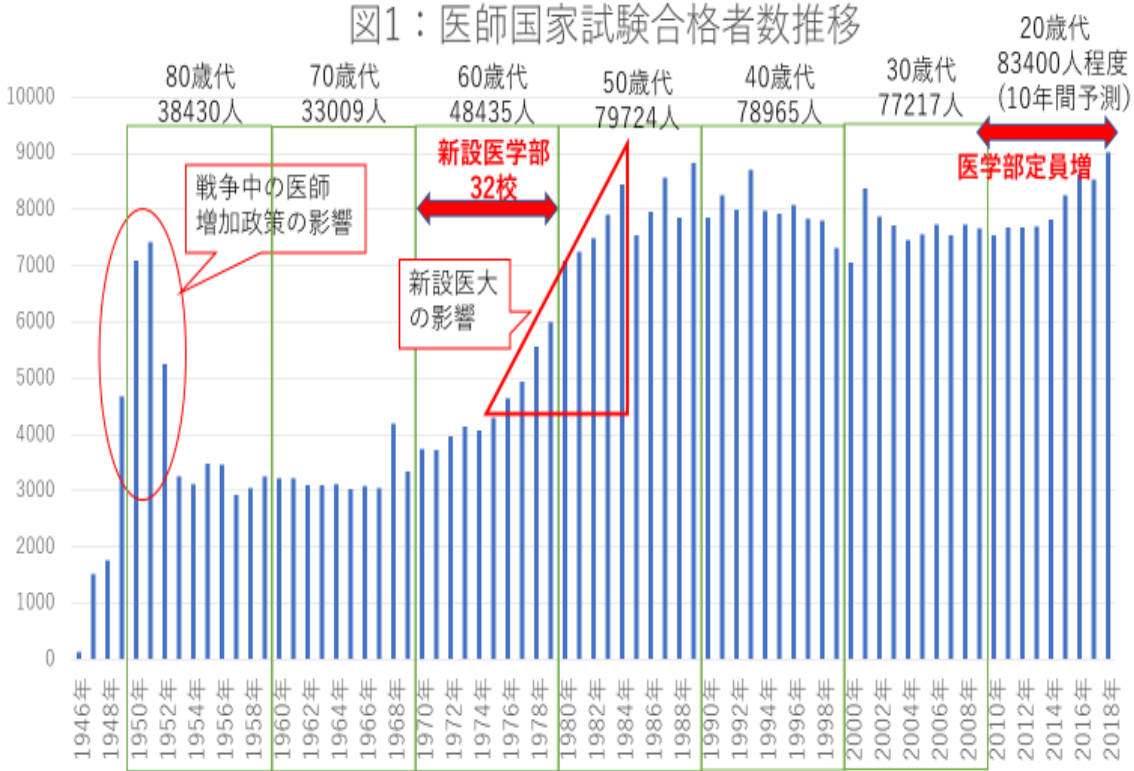
医師偏在の3つのポイント

1. 今後、これまでのように医師は増えなくなる
2. 外科医減少が顕著になり、今後手術を受けるのが難しくなっていくことが予想される
3. 過疎地の医師不足が顕著になり、都市部との医療格差が拡大することが予想される

(医師数の推移)

我が国の医師数の推移は、他国との間の医師の流入・流出が少ないので、「ある年の医師国家試験の合格者が医師の仲間入りし、その後少しずつ減少していく、そして次年度以降も新たな医師国家試験合格者が医師の仲間入りする」という流れの中で考えることができる。

図1は、医師国家試験合格者数の年次推移を示している。1946年の第1回医師国家試験から今年(2018年)に行われた第112回試験までに43万6309人の合格者が輩出された。

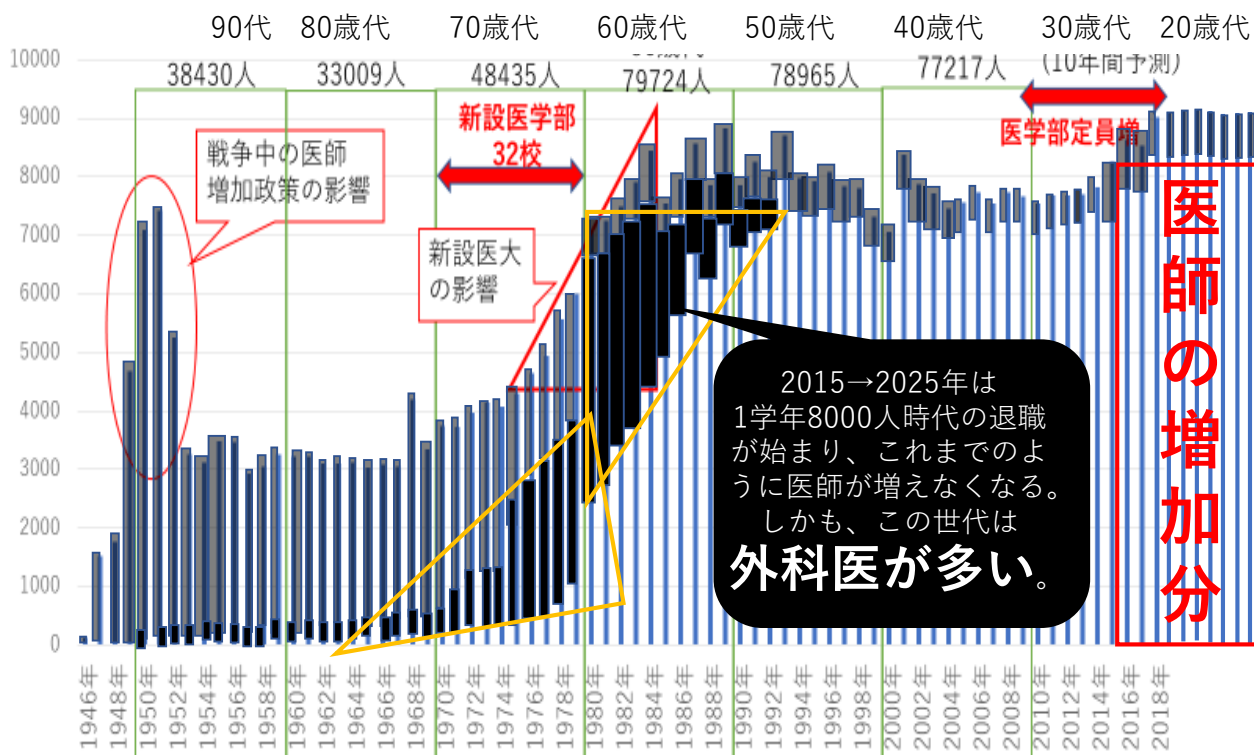


1950年前後に一時的に合格者数が多いのは、戦時中に戦地で働く医師を増やすためにとられた医師養成数増加政策によって一時的に急増した卒業生の影響である。その後、1952年(昭和27年)から1974年(昭和49年)にかけては、3000人から4000人のペースで、毎年医師が輩出されてきた。1970年の秋田、杏林、北里、川崎医大の医学部の新設を皮切り

に 1979 年の琉球大学まで 1970 年代に 32 大学で医学部が新設された。1970 年に新設された医学部の第 1 期生が卒業した 1976 年から、1979 年に新設された医学部の第 1 期生が卒業した 1985 年にかけて医師国家試験の合格者数は 4000 人から 8000 人に急増した。その後 1985 年から 2015 年にかけての 30 年間は、8000 人±500 人程度で推移していた。その後 2009 年に医学部定員増が打ち出され、その成果が本格的に表れる 2018 年からは、9000 人程度の合格者が輩出されることが予想される。

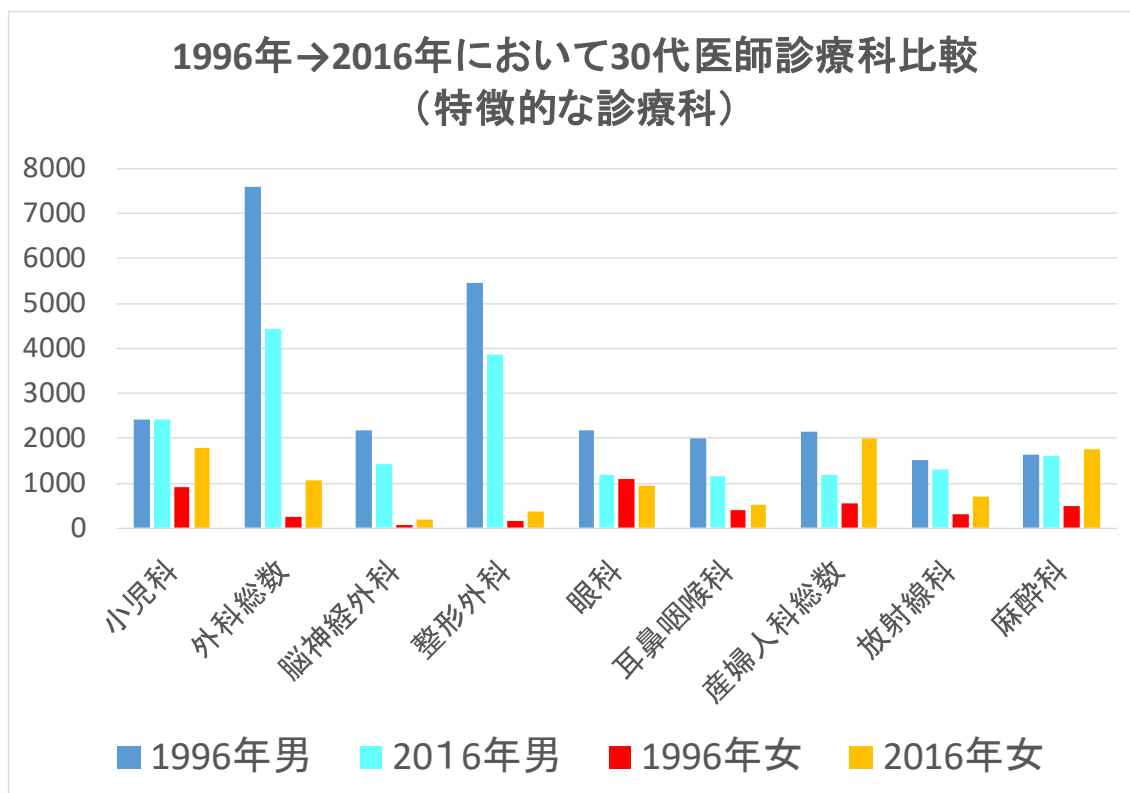
図 2 は、2015 年から 25 年にかけての医師の増減を表す。右の長方形で囲まれた部分が 2016 年から 2025 年にかけての医師国家試験合格者数であり、左の三角で囲まれた黒い線が退職する医師を表す。この期間は、2009 年より始まった医学部入学者定員増の影響で国家試験合格者数が増加したが、新設医大新設時の卒業生の退職が始まり、医師の退職がこれまで以上に顕著となる。1995 年から 2015 年にかけては、国家試験の年間 8000 人ベースで合格し、年間 4000 人程度が退職し、年間 4000 人程度医師が増えていた。しかし 2016 年から 2025 年は、国家試験の年間 9000 人ベースで合格するが、年間 6000 人以上が退職し、医師の増加スピードは年間 3000 人を切ると思われる。

図 2：2015 年から 25 年にかけての医師の増減



(30 歳代の医師の診療科推移)

図 4 に、今後の医療提供体制に大きな影響を及ぼしそうな診療科別医師数の推移を示す。30 歳代の小児科医数は 1996 年から 2016 年の 20 年間に 25%増加しているが、その増加は女性医師の増加による。外科、脳神経外科、整形外科は、男性医師は 30%、29%、24%と大きく減少しており、女性医師は 2~3 倍と大幅に増加しているが、男性医師の減少を補っていない。30 歳代の眼科、耳鼻科医師は全体で 36%、31%の減少であるが、特に男性医師の減少が顕著である。産婦人科や放射線科は全体で増加だが、男性の大幅減少を、それを上回る女性のそれを上回る増加の結果である。麻酔科は 57%増加と急増したが、男性は 2%減少であったが、女性が 247%増加し 30 歳では女性医師の数が、男性医師の数を上回る状況になった。



(図 4 : 30 歳代の医師の診療科別医師数推移)

外科医の偏在について

表1に、地域別、性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科総数の1996年と2016年の実数と、2026年の推計値を示す。また図1-1は、全国の性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科医総数の推移と2026年の推計値を示すグラフである。

先にも述べたように、外科医の全数(表1の3行目黄色で示す)は、1996年26,070人から2016年24,073人へと1,997人、率にして8%減少している。また、2026年にかけて23,278人へと35人(1%)減少することが予想される。

一方、病院/診療所別の推移(表1の5行目薄い緑色で示す)に注目すると、病院勤務の外科医が20,112人→20,067人と20年間ほとんど変わらないが、診療所勤務の外科医は5,958人→4,006人と33%も減少し、2026年には2,867人まで減少すと推計される。**外科医の減少は、診療所勤務の外科医減少によるものであり、病院勤務医の数はほぼ一定である。**

次に、男性外科医は1996年25,442人から2016年21,982人へと3,460人(14%)減少したが、女性外科医は566人から1,892人と1,326人の増加、3.3倍にまで急増している。**女性外科医は急増しているが、男性外科医の減少を補うまでは増えていない。**

30歳代の病院勤務の外科医数(表1の7行目赤とピンクで示す)は、男性外科医が1996年7,318人→2016年4,393人→2026年3,970人と減少する一方、女性外科医は1996年244人→2016年1,020人→1,239人と急増している。1996年に30代であった男性外科医7,318人は、2016年50歳代になっても4,574人が外科医として病院勤務を続けており、1996年の50歳代病院勤務男性外科医2,123人と比べ50歳代の外科医が2,451人も増加している。図2-1の1996年30代男性外科医の7,318人に相当する水色の長い横棒が、2016年50歳代4,393人に移行している。同様に、1996年40代男性外科医の5,043人に相当する水色の長い横棒が、2016年60歳代2,463人に移行している。1996年から2016年にかけて20歳代、30歳代の男性外科医が急減しているにも関わらず、病院勤務の外科医数が保たれているのは、この間の**女性外科医の急増と、50歳代60歳代で病院勤務をしている男性外科医の増加**による部分が多い。50歳代の病院勤務外科医が増えたのは、1970年代の医大新設により医学部卒業生が急増した影響が、60歳代の病院勤務外科医が増えたのは、開業をせず病院勤務を続ける選択をする医師が増えたことによると思われる。50歳代、60歳代の外科医の比率が高まり、病院外科医の数は変わらなかったことは、外科医の高齢化が急速に進んだことを意味する。

2016年に50歳代、60歳代である外科医は、2026年には60歳代と70歳代になり、外科医としての戦力は確実に低下する。**2016年から2026年にかけて病院勤務の外科医数は大きく変わらないが、女性外科医の増加と、若手男性外科医の減少、高齢男性外科医の増加傾向が更に進む**ことが予想される。

	外科総数		総計						男						女					
			1996年		2016年		2026年		1996年		2016年		2026年		1996年		2016年		2026年	
	全数		26,070		24,073		23,728		25,442		21,982		20,587		628		2,091		3,141	
	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所	病院	診療所
全国	合計	20,112	5,958	20,067	4,006	20,861	2,867	19,546	5,896	18,175	3,807	17,978	2,609	566	62	1,892	199	2,883	258	
	20歳代	3,289	22	1,177	3	1,177	3	3,028	21	911	3	911	3	261	1	266	0	266	0	
	30歳代	7,562	281	5,413	82	5,209	37	7,318	268	4,393	49	3,970	37	244	13	1,020	33	1,239	0	
	40歳代	5,079	1,007	5,374	463	4,936	188	5,043	994	4,909	379	4,061	113	36	13	465	84	875	75	
	50歳代	2,118	1,126	4,700	908	4,428	560	2,113	1,119	4,574	856	4,042	461	5	7	126	52	385	99	
	60歳代	1,423	2,120	2,478	1,209	3,468	899	1,414	2,110	2,464	1,188	3,350	850	9	10	14	21	118	50	
	70歳代	511	1,205	679	751	1,344	854	502	1,188	679	745	1,344	823	9	17	0	6	0	32	
	80歳以上	130	197	246	590	299	325	128	196	245	587	299	323	2	1	1	3	0	3	
	大都市	合計	9,019	2,355	9,341	1,634	10,276	1,237	8,699	2,318	8,264	1,499	8,450	1,041	320	37	1,077	135	1,826	196
20歳代		1,494	8	552	1	552	1	1,360	8	410	1	410	1	134	0	142	0	142	0	
30歳代		3,514	118	2,921	54	2,973	0	3,362	111	2,324	29	2,108	0	152	7	597	25	865	0	
40歳代		2,225	378	2,590	210	2,699	136	2,204	371	2,324	148	2,160	62	21	7	266	62	538	74	
50歳代		913	414	2,001	396	2,089	267	910	409	1,933	364	1,862	199	3	5	68	32	226	68	
60歳代		610	857	950	466	1,379	382	605	852	946	453	1,324	347	5	5	4	13	54	35	
70歳代		215	505	238	272	485	338	211	492	238	269	485	318	4	13	0	3	0	20	
80歳以上		48	75	89	235	100	114	47	75	89	235	100	114	1	0	0	0	0	0	
地方都市		合計	9,169	2,999	9,189	2,025	9,417	1,406	8,956	2,977	8,441	1,969	8,352	1,336	213	22	748	56	1,065	70
	20歳代	1,526	9	561	1	561	1	1,413	8	444	1	444	1	113	1	117	0	117	0	
	30歳代	3,319	134	2,213	25	2,145	6	3,241	128	1,823	18	1,722	6	78	6	390	7	423	0	
	40歳代	2,381	524	2,426	234	2,044	59	2,368	519	2,249	214	1,730	46	13	5	177	20	314	13	
	50歳代	979	604	2,237	437	2,043	277	977	603	2,182	420	1,886	248	2	1	55	17	157	28	
	60歳代	672	1,068	1,241	625	1,714	449	670	1,063	1,233	618	1,659	436	2	5	8	7	55	13	
	70歳代	225	577	378	405	740	437	221	574	378	403	740	423	4	3	0	2	0	14	
	80歳以上	67	83	133	298	171	179	66	82	132	295	171	177	1	1	1	3	0	2	
	過疎地域	合計	1,924	604	1,537	347	1,264	212	1,891	601	1,470	339	1,203	205	33	3	67	8	61	6
20歳代		269	5	64	1	64	1	255	5	57	1	57	1	14	0	7	0	7	0	
30歳代		729	29	279	3	181	2	715	29	246	2	163	2	14	0	33	1	18	0	
40歳代		473	105	358	19	215	3	471	104	336	17	188	3	2	1	22	2	27	0	
50歳代		226	108	462	75	292	19	226	107	459	72	285	17	0	1	3	3	7	2	
60歳代		141	195	287	118	365	70	139	195	285	117	362	67	2	0	2	1	3	3	
70歳代		71	123	63	74	119	83	70	122	63	73	119	82	1	1	0	1	0	1	
80歳以上		15	39	24	57	29	33	15	39	24	57	29	33	0	0	0	0	0	0	

(表1：地域別、性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科総数の数値と2026年推計値)

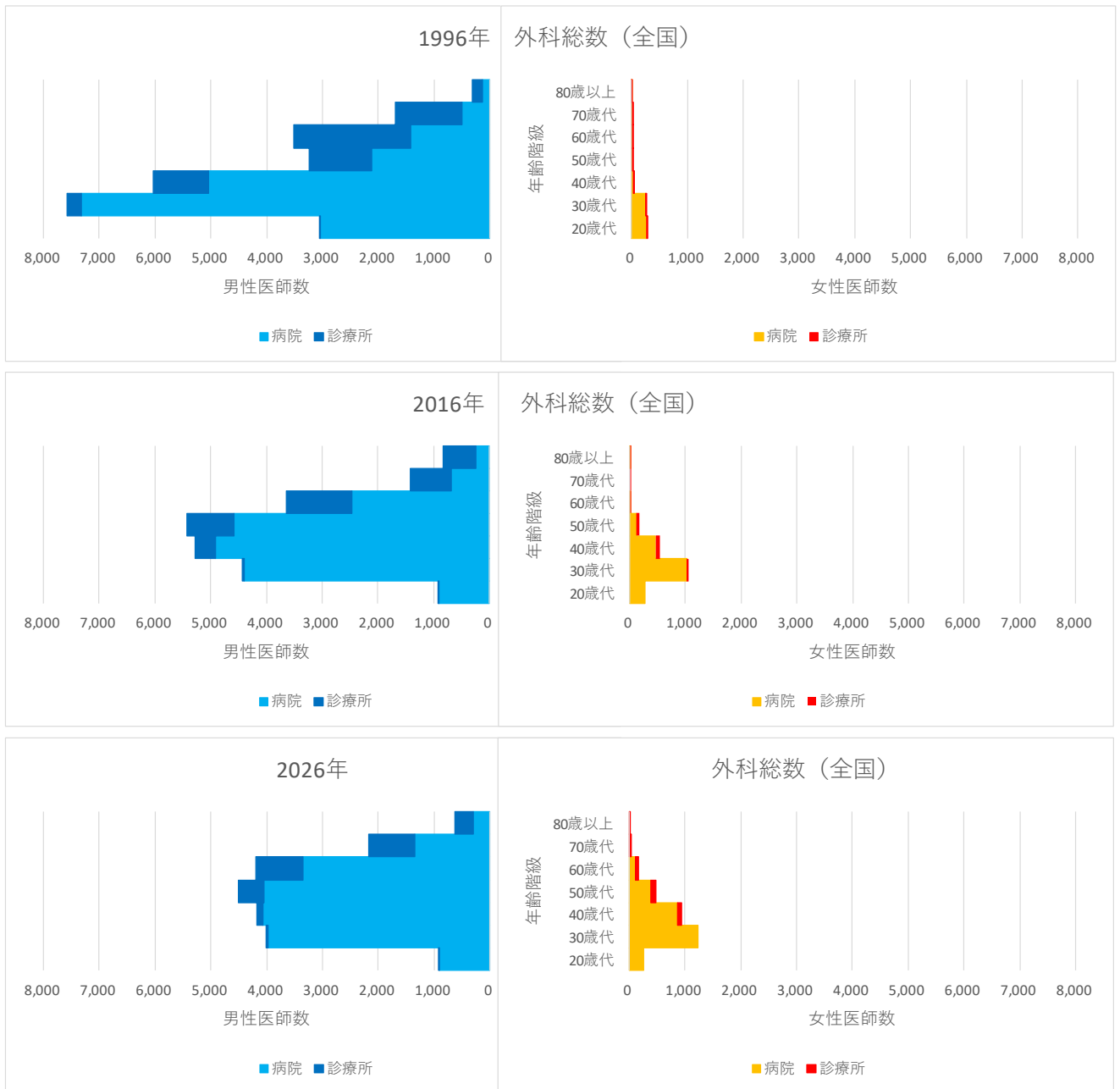


図 2 -1：全国の性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科総数の推移と 2026 年の推計値

図 2 -2 に大都市と過疎地の 2016 年の性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科総数と 2026 年の推計値を棒グラフで示す。

連載 2 で述べたように、女性医師は大都市志向が強く、また近年男性医師も過疎地域で勤務する比率が急速に低下しており、外科医でも同様の傾向が見られる。その結果、2016 年の大都市では、30 代、40 代の男性外科医と女性外科医が多く、過疎地域では 50 歳代の男性外科医が多い。また、2016 年から 2026 年にかけて大都市は外科医の増加が期待でき、若手医師が加わることにより、外科医の年齢構成も 2016 年と大きく変わらない。一方過疎地は、

若手外科医が増えず、外科医の大幅な減少と更なる高齢化が進行し、現在の主力である 50 歳代医師が 60 歳代になっても主力となって外科を運営せざるを得ない状況が予想される。

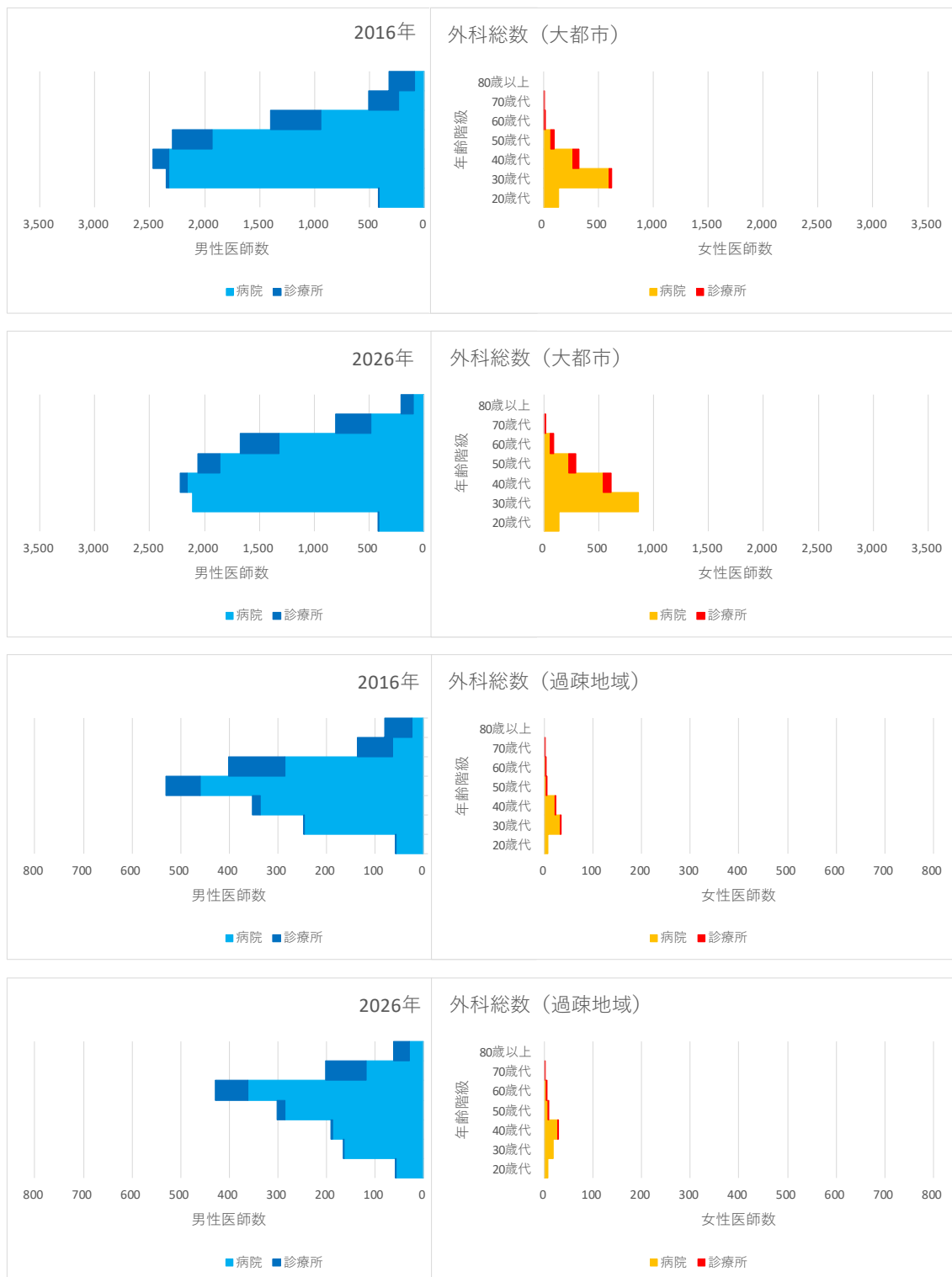


図 2-2：大都市と過疎地の 2016 年 2026 年性別、年齢階級別、病院/診療所別の外科医総数

(30 歳代の医師の勤務地域推移)

図 3-1 は、「過疎地域」勤務比率の男女別・年代別推移を表す。この図は、例えば、1996 年の 20 歳代の男性勤務医の 8%が、女性勤務医の 3%が過疎地に勤務していたことを示している。この図より、

- (1) 1996 年から今日まで女性臨床医の過疎地勤務比率は、男性医師と比べ一貫して低い
- (2) 近年若い男性臨床医の過疎地勤務比率が、急激に低下している

ことが読み取れる。もともと過疎地勤務比率が低い女性医師の増加と、男性若手医師の過疎地勤務比率の急速な低下が相まって、過疎地の若年医師が急減している。

図 3-1 「過疎地域」勤務比率の男女別・年代別推移

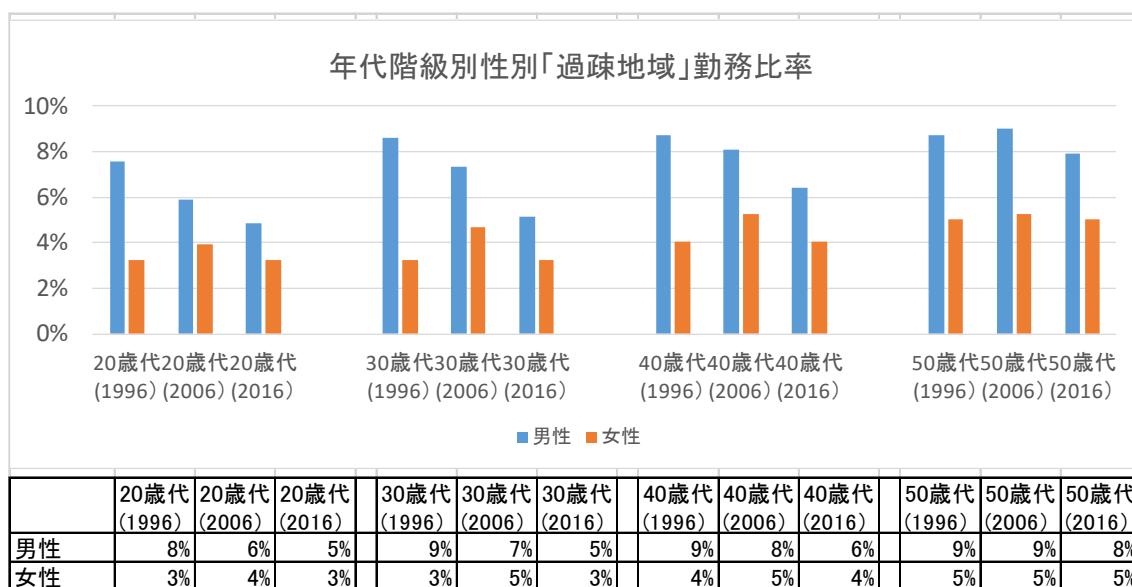
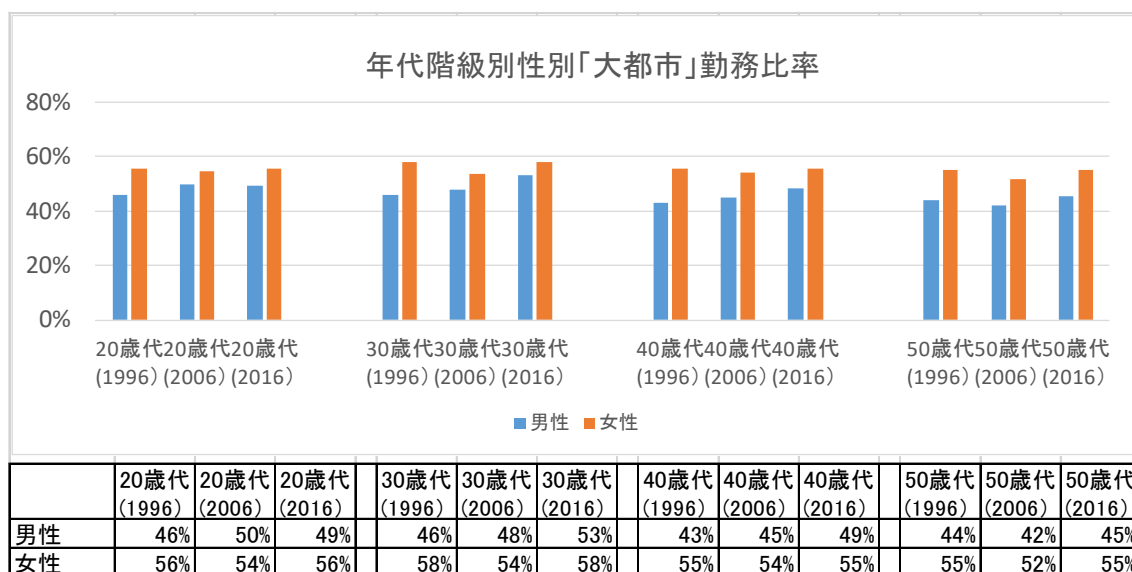
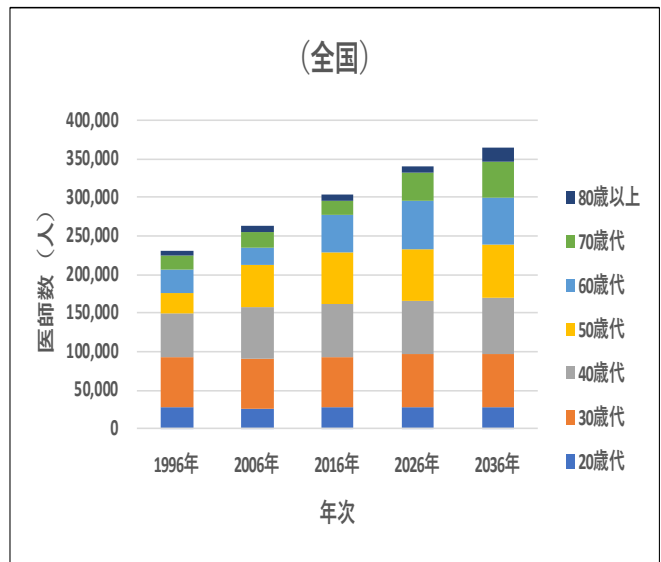


図 3-2 「大都市」勤務比率の男女別・年代別推移



地域別年齢階級別医師数推移（全国）

全国	（推移）			（予測）	
	1996年	2006年	2016年	2026年	2036年
合計	230,297	263,540	304,759	341,190	365,481
20歳代	27,300	25,996	27,725	27,725	27,725
30歳代	66,307	64,602	64,878	69,193	69,193
40歳代	56,198	67,701	68,344	68,636	73,201
50歳代	26,630	53,919	67,286	67,925	68,215
60以上	53,862	51,322	76,526	107,711	127,147
比率	23%	19%	25%	32%	35%
60歳代	29,132	23,268	49,630	61,934	62,522
70歳代	19,964	19,416	17,489	37,304	46,551
80歳以上	4,766	8,638	9,407	8,473	18,073



地域別年齢階級別医師数推移（過疎地域）

過疎地域医療圏	（推移）			（予測）	
	1996年	2006年	2016年	2026年	2036年
合計	19,259	20,135	19,873	19,078	17,536
20歳代	1,837	1,349	1,193	1,193	1,193
30歳代	5,400	4,334	2,953	2,612	2,612
40歳代	4,706	5,198	3,989	2,718	2,404
50歳代	2,217	4,666	5,042	3,869	2,636
60以上	5,099	4,588	6,696	8,686	8,692
比率	26%	23%	34%	46%	50%
60歳代	2,455	2,023	4,395	4,749	3,645
70歳代	2,041	1,675	1,478	3,211	3,470
80歳以上	603	890	823	726	1,578

